

# 人から人へ語り継ぐ 紙芝居で知る川の記憶

かつて豊島区には、人々に親しまれた多くの水辺がありました。時代の移り変わりの中でその多くは暗渠化され、今はその水にふれることはできません。その水辺の一つが千川上水です。

区内で活動する区民団体が、今は失われてしまった昔の水辺の風景と、今も変わらない暮らし中の水の大切さを、紙芝居「千川上水物語」を通じて子どもたちに伝え続けています。

右上の写真は、昭和15年頃の千川上水です。千川上水は江戸の六上水の一つで、玉川上水から分かれ、江戸城の城北地域を流れる総延長約22kmの人口の川でした。豊島区内では、現在の千川通りと巣鴨あたりを流れ、また谷端川にも分水としてつながっていました。江戸時代には生活用水、明治時代には農業用水として利用される一方、桜やかえでの木々が兩岸を彩る身近な水辺として人々の暮らしの中に息づいていました。

区民ひろば千早を運営する「NPO法人はばたけ千早」の「語り部部会」は、これまでに「千川上水物語」など4つの紙芝居を作成してきました。「世代間交流を通じて活力のある地域社会、豊かなコミュニティの実現に貢献する」ことを目標に平成22年に活動を開始。「地域の歴史を子どもたちに伝えたい」という思いをきっかけに、メンバー12名が、それぞれの知識や人生経験をもとにして豊島の今昔を伝える紙芝居を作ることにしました。シナリオから絵、紙芝居の枠まですべて手作りで「子どもたちにわかりやすい言葉を使ったり、好奇心をかきたてるような絵を入れたり、工夫を凝らしています」と、語り部部会の会長、齋藤康芳さん。紙芝居の語りもメンバーが行い、これまでに幼稚園、小学校ほかさまざまな施設で70回以上も上演してきたそうです。

紙芝居「千川上水物語」は、おじいちゃんが孫のさくらちゃんに昔の千川上水を語っていく形で進んでいきます。おじいちゃんの子どもの頃、千川上水には水車がいくつも回ってお米をついたり、麦をひいて粉にする作業に利用されていました。また、生活のためだけではなく、春は花見、秋は紅葉と人々の季節の楽しみでもあったことなどが、温かみのある絵と言葉で生き生きと語られています。資料や文献だけでは伝わりきれない川の記憶を、「千川上水物語」が時代を超えて子どもたちの心の中によみがえらせています。



昭和15年頃の千川上水

写真提供：学校法人根津育英会武蔵学園 学園記念室



手作りの紙芝居と齋藤さん



小学校での上演会の様子

特定非営利活動法人 はばたけ千早 語り部部会へのお問い合わせはこちらまで → 区民ひろば千早 ☎03-3959-2281

## Vol.① エコのわブック

エコや環境を意識して暮らす『きっかけ』をくれる一冊を紹介します。読み終えたら、きっと水や自然の大切さを感じることができるはず。



「森が海をつくる」  
絵・文／葉 祥明  
英訳／リッキー ニノミヤ  
発行／自由国民社

『森が海をつくる』は、海の豊かな自然が森によって支えられていることを犬のジェイクが自然と対話しながら伝える物語です。ジェイクは海の声に呼ばれ、海から川を遡って森まで巡っていく中で、海と森のつながりを知ります。そして、森からの養分を運ぶ雨や水の大切さ、豊かな自然をとりもどすために大切な心を学びます。透明感をもつ油絵で描かれる水や緑の世界は美しく、眺めているだけで心が洗われるようです。初版から約20年経つ現在も、子どもから大人まで世代を越え、愛され続けています。

全ページに英訳が併記されているので、単語を調べながら読み進めていく楽しみ方もあり、お誕生日のプレゼントなどにもぴったり。

作者の葉 祥明は、環境問題と動物を主題にした物語を数多く制作している絵本作家で、この作品はジェイクの環境メッセージ絵本3部作の1つです。